

## 第 Ⅲ 章 表現力の育成を中心とした取り組み(2)

### —劇づくりの学習を通じた指導—

#### 1. 子どもと表現活動

本学級では「生活力のある子ども」の育成をめざし、ことばや行動で自己を表現し、主体的に行動する力を育てる指導についての研究を継続してきた。自分の意思を表現する手段のひとつに話しことばがあるが、それに付随して重要な役割を担うものとして身ぶり、表情などの身体動作がある。こうした動作を伴う表現には遊びの要素が多く含まれているため、子どもの活動意欲を高めるためのひとつの要因となっている。

ことばの発達段階、興味・関心等の異なるひとりひとりの子どもに共通して言えることは、身体動作を伴う歌や踊りなどの表現活動を大変喜ぶことである。表現意欲を持たぬ子どもは誰ひとりとしていない、喜んで取り組める表現活動を指導者側が数多く用意してやるのが、子どもの表現意欲を高め、ひいては生活の中で生きてはたらく表現力を培うことにつながると考える。

#### 2. 劇づくりの学習の目的と仮説

本学級の児童は自分の気持ちや体験を表現し、伝達したいという意欲をもっているが、それがさまざまな要因で実現されにくいことも多い。それは、その子の個人的な条件であったり、その子を取りまく周囲の環境であったりする。私たちは、ひとりひとりの児童や周囲の環境にはたらしかけることにより、児童の表現意欲を高め、表現力を育てる必要がある。

「表現」と「理解」とは表裏の関係にあるとも言われる。表現にはことば、絵、動作などいろいろな方法があるが、身体を通しての表現は児童の認識をも深める作用をもっている。学習したことを実際に動作化してみることでそこでの理解が深まったという例は多い。また、表現のさまざまな方法は、私たちが児童の理解の状態を知る手がかりとしても重要な意味を持つ。

劇づくりは、国語（話を理解する、セリフを言うなど）、音楽（歌をうたう、身体表現をするなど）、図画工作（小道具などを作る）などを総合的に組織できる学習であり、目的意識をもたせながら継続して各教科のねらいにせまることができ、しかも集団の中で自分の役割りや仕事を意識して行動する力を養うことができる。

こうしたことをふまえ、この劇づくりの学習では以下の基本的仮説を設定した。ただし、実際の学級別の指導では児童の実態に合わせたより具体的な仮説に変更し、指導にあたった。

##### 基本的仮説Ⅰ

演技発表という大きな目標を設定することで、児童は劇づくりの学習に意欲的に取り組み続けられるであろう。

##### 基本的仮説Ⅱ

身ぶりや踊りなどの身体動作を伴う表現活動を学習に取り入れることで、言語による意思の伝達が比較的困難な児童も意欲的に学習に取り組み続けることができ、表現活動が豊かになるであろう。

##### 基本的仮説Ⅲ

物語の理解（登場人物やあら筋等の理解）の段階で動作化を取り入れることにより、そこでの理解が促進され、劇中の場面や情景に応じた表現ができるようになるであろう。

##### 基本的仮説Ⅳ

自分の役割りや流れを考えながら演技活動に取り組みさせることで、友だちとのかかわりが深まり、協調性が養われるであろう。

### 3. 劇づくりの学習の位置づけ

本学級では以下の年間計画に基づいて総合学習（生活単元学習）を実施しており、この中に劇づくりの学習を位置づけている。12月の「クリスマス会」と3月の「学芸会」がこの学習にあたる。

月	学習会	予定時数	区分	月	学習会	予定時数	区分
4	おむかえ会	7	B	11	宿泊学習(3)	1泊+4	d・E
	春の遠足	1日+2	C		野菜のとりいれ	3	F
5	バス会社見学	1日+2	C		みかんがり	1日+3	C・F
	畑のしごと	3	F	12	市内めぐり	6	C
6	広島城	1日+2	C		クリスマス会	35	A・B
	宿泊学習(1)	1泊+4	D・E	1	新年おたのしみ会	3	A・B
7	公園へ行こう	5	C	もちつき	3	A・E	
	たなばた	5	A・F	2	節分	3	A・E
9	お月見	7	A・E		スキーをしよう	1日+3	A・C
	宿泊学習(2)	1泊+4	D・E	3	学芸会	15	A・B
10	秋の遠足	1日+2	C	ひなまつり	5	A・E	
	まつりをしよう	12	A・E・F	おわかれ遠足	1日+2	C	
				おわかれ会	4	B・E	

区分について

- A…季節的行事
- B…集会(おたのしみ会)
- C…校外学習
- D…宿泊学習
- E…調理実習
- F…労作・製作

### 4. 劇づくりの学習の構造

#### (1) 「クリスマス会」と「学芸会」

本学級児童は毎年12月のクリスマス会と、3月の学芸会（本校全体で取り組む学習発表会）という二つの大きな総合学習的行事の中で演技発表している。クリスマス会では各クラスごとに劇を演技発表し、学芸会では三クラスの児童全員が力を合わせてひとつの劇を発表する。原則としてクリスマス会で発表した題材を学芸会につなげている。

#### (2) 児童の実態に合った題材えらび

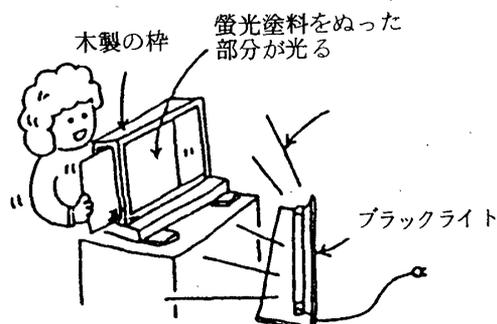
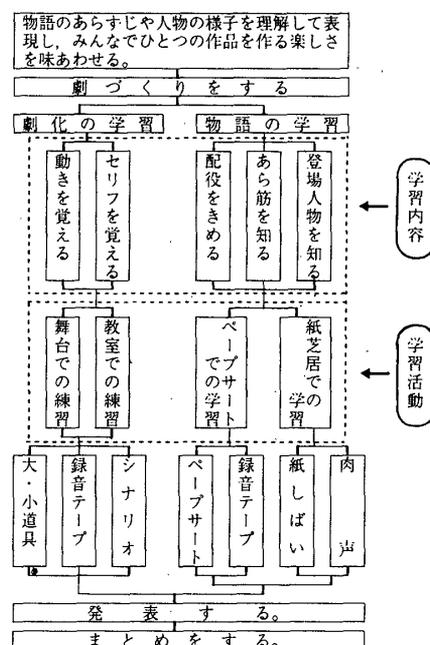
児童の実態によりクラスごとの観点を設定する場合もある。

- ① 児童全員がそれぞれの段階に応じて理解しやすく、かつ興味・関心のもてる題材であること。
- ② 児童全員がなんらかの配役につける題材であること。
- ③ なるべく観る側も内容を知っている題材であること。

#### (3) 「物語の学習」について

題材が決まれば、その原作に基づいて物語のあら筋などを学習していくが、これを「物語の学習」と称している。ここでは物語の内容を理解することがねらいとなり、絵本、紙芝居（下図は蛍光塗料を使用した例）、ペープサート（写真）などを活用することにより、登場人物やあら筋を理解させ、次の「劇化の学習」に発展させていく。

学習の構造図



#### (4) 「劇化の学習」について

教室あるいは体育館にしつらえた舞台の上で自分の役に合わせて演技したり、セリフを言ったりする学習を「劇化の学習」と称している。物語のあら筋や配役の動きを児童が理解し始めると、それと並行させながら徐々に舞台上での演技練習を開始する。ここでは身ぶりなどの身体表現の指導が重要なポイントになる。児童に人気のある歌や踊り、動作などを劇に取り入れることでひとりひとりの児童が活躍できる場（いわゆる「見せ場」）を用意しておくことが、児童の演技意欲を高める重要なポイントのひとつになっている。

劇中ではセリフを実際に言いながらの演技が理想であるが、本学級では児童の声と効果音とを編集した演技用テープを用意し、その録音内容（声、効果音など）に合わせて演技できるように指導してきた。自分自信の声が録音されているテープを聴かせることは、劇化学習への意欲づけに大きな効果をもっている。なお、発語することがむずかしいセリフについては、大人の声そのまま使用した箇所もある。

前ページの構造図では「物語の学習」と「劇化の学習」とを分けており、実際中学年組と高学年組についてはこのように二つの段階を順に追うといった形態をとっている。しかし、児童の興味・関心や理解力、表現力等の発達段階を考慮して、低学年組については両者をミックスさせた形態で学習を進行させている。たとえば児童が興味をもつ歌や踊りから指導を開始し、動作化させるなかで物語の学習も同時に進めていくという形態である。こうした意味で前ページの構造図の要素とその系統については児童の実態に合わせて柔軟に考えている。

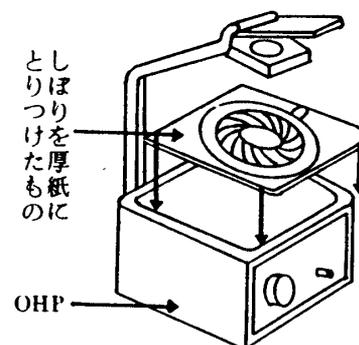
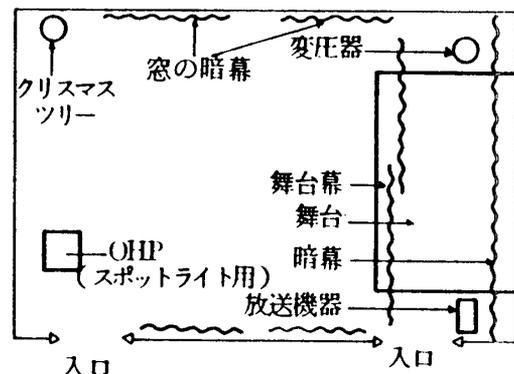
#### (5) 発表会場の設営と諸準備

発表会場は学級のプレールームである。会場の設営としては、劇の演技発表の場としてひな段を組み合わせ舞台（210×460×30cm）を作る。舞台背後の黒板ならびに掲示物などは暗幕等で覆い、舞台上で演じる児童がひき立つよう配慮する。照明は舞台上方の蛍光灯に加えて、変圧器により明るさの調節が可能な電球を二つ備えつける。また会場後方のOHPから種々の色セロハンを通した光を舞台にあてることにより、スポットライト的效果を図る。その際に、市販されている大型の舞台照明装置にとりつけてある光量のしほりをOHPのガラス面に備えつけることで（右図）、舞台上の個人へのスポットから、全員への大きなスポットまでその用途を広げることができる。

会場の飾りつけには市販のモールやツリーランプ等も使用するが、児童の製作による輪かざりや絵なども多く使用する。こうした作品はクリスマス会の雰囲気高め、楽しいものにしてくれる。

#### 5. 劇づくりのまとめと発展

発表した劇はVTRで録画し、視聴覚教材として残して活用している。また物語の学習などで使用した紙芝居などはスライド用フィルムに接写し、自作スライド教材を製作しておけば今後の学習に大いに生かせる。高学年組では劇のストーリーに基づいたカレンダー作りを行っているが、自分たちが演技した内容なので製作への取り組みは意欲的なものになっている。このカレンダーは毎年、本校の全学級に配られ、子どもたちの交流に役立ってきた。



# 劇づくりの実際

## —— 劇「さるかにがっせん」(障害児学級中学年組) ——

### 1 題材「さるかにがっせん」の決定

劇の題材を選択する際の観点として29ページで述べたので、ここでの重複は避けたいが、日本昔話「さるかにがっせん」はその観点の①から③までの内容を満たしている。「さるかにがっせん」はストーリーの展開が比較的単純でつかみやすく、しかも登場人物の役割もはっきりしているため、本学級の児童の実態に合っていると考えた。そして必要に応じてそのあら筋や内容に若干の変更を加えることで、児童による表現豊かな劇化が可能になると判断した。また、この昔話は一般によく知られている話であり、演じる側と観る側との一体感が形成されやすいという長所もあると考え、題材を「さるかにがっせん」に決定した。

### 2 指導にあたって

本学級の児童は絵本が大好きである。気にいった絵本があると図書室から家にもちかえり、親に読んでもらったり、あるいは読んできかせてあげたりすることもある。こうした児童の興味・関心を生かすため、絵本づくりを国語の学習の中に位置づけてみることにした。

#### (1) 絵本づくりについて

劇づくりの構造(29ページ参照)の中の「物語の学習」にこの絵本づくりを位置づけてみた。物語の要素(登場人物、あら筋等)の理解をよりよく促進させることを目的とした。

#### (2) 「物語の学習」で使用する絵と指導計画

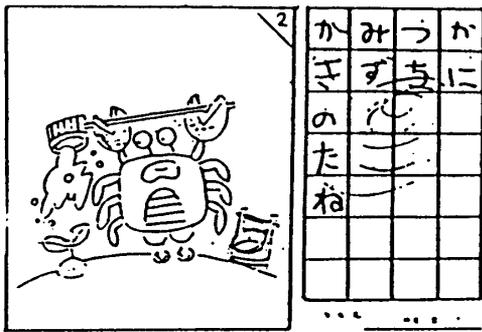
絵本づくりの学習で使用する絵は子どもに理解されやすいものである必要がある。このたび用意した絵は、NHKサービスセンター紙芝居「さるかにがっせん」(学研)を参考にした。物語のあら筋のポイントとして、下図のように八つの場面を選んで絵にした。これらの絵にもとづき、



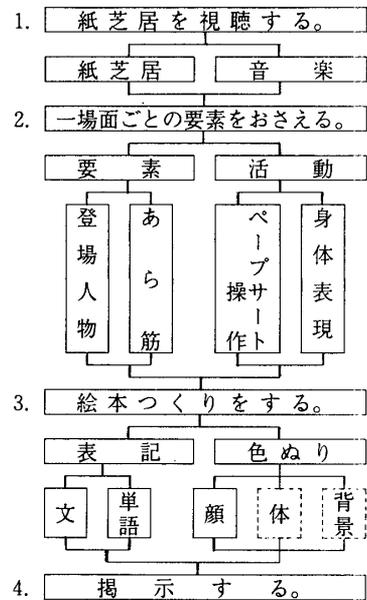
場面	場面の内容	計画(概計六時間)
第一場面	カニとサルがおにぎりをとりかえる	第一時
第二場面	カニがカキの種をうめて、水をまく	第二時
第三場面	カキの種は木になり、実をつける	第三時
第四場面	サルが実をなげ、カニがケガをする	第四時
第五場面	ハチ、クリ、ウスが怒る	第五時
第六場面	クリがはじけてサルがやけどをする	第六時
第七場面	ハチがサルをちくりとさす	
第八場面	ウスがサルの上にとびおる	

物語の学習に取り組ませた。それぞれの場面の絵の説明と指導の流れについて前ページの表に示している。この絵本づくりを通した物語の学習を計6時間扱いとした。

これらの絵の右側に下図のような表記欄を設け、書写活動を取り入れられるようにした。これは物語の要素（登場人物、あら筋等）の理解をさらに定着させることをねらったものである。



単文を書ける段階の児童⑩、⑪、⑭、⑮には縦11、横6のマス目とし、単語（清音）をゆっくり書けるようになった段階の児童⑧、⑨、⑫、⑬には縦7、横4のマス目を用意した。



使用した絵に関して共通して言えることは、一枚の絵に二～三の内容が含まれているという点である。第一場面の絵について言えば、①カニとサルとがそれぞれオニギリとカキの種とを見つけ、②それらをお互いに交換する、という二つの内容が含まれている。こうしたあら筋を一枚の絵で児童に理解させることはむずかしいと予想したので、この絵本づくりと平行させてペープサートや身体表現を取り入れた指導も位置づけた。一単位時間の学習過程を右上図のように計画して指導に入った。

### (3) 児童の実態と課題（昭和61年度）

本学級児童の物語の理解と表現に関する実態と課題は次の表の通りである。課題については、舞台上の演技に関連させて記述した。

児童	実 態	課 題
男児⑧	おおまかな全体の流れと場面場面を関連づけて理解できる。表情豊かに表現することができる。	一人二役、あるいは主役として、豊かな表現ができるようになる。
男児⑨	ひとつひとつの場面および全体のストーリーの理解ができ、表情豊かに表現することができる。	一人二役、あるいは主役として、豊かな表現ができるようになる。
女児⑩	ひとつひとつの場面および全体のあら筋の理解がよくできる。時間的経過を絵と単文で表現できる。	内容についてよく理解できているので、それに基づき豊かに表現できる。
女児⑪	ひとつひとつの場面および全体のあら筋の理解がよくできる。時間的経過を絵と単文で表現できる。	他児にうまくかわかり、身体表現に合わせて言語表現ができる。
女児⑫	物語の理解は困難だが、登場人物の姿や特徴的な動作については再現できることがある。	友人の援助のもとで劇中の踊りなどに参加し、身体表現ができる。
男児⑬	印象的な内容を断片的に理解している。言語表現は困難だが、気分が乗ると大まかな演技ができる。	友人の援助のもとで自分の役の大まかな演技ができる。
男児⑭	注意の集中、持続ができにくく、印象的な部分を理解している。人前での発表を恥ずかしがる。	友人の演技に合わせて自分の役の大まかな演技ができるようになる。
女児⑮	ひとつひとつの場面、および全体のストーリーの理解ができる。人前での発表を恥ずかしがる。	全体の流れを理解して、みんなの前で表現できるようになる。

### (4) 「さるかにがっせん」を指導するにあたって設定した仮説

ページで述べた基本的仮説をふまえ、本学級の児童の実態に合わせた仮説を次のように仮

定した。

仮説①……入学以来数回の演技発表をクリスマス会で体験してきた本学級児童にとって、親や友人の前での演技発表という目標は劇づくりの学習全般を意欲づけるであろう。

仮説②……物語の学習における一単位時間の学習過程の中に身体表現活動を導入することで（前ページの図参照）、言語による意志の表現が比較的困難な児童（児⑫，⑬，⑭，⑮）も意欲的に学習に取り組み続け、物語の理解が促進されるであろう。このことは場面や情景に応じた表現につながるであろう。

仮説③……劇化の学習の段階で周囲の児童とかかわり合う必要のある演技を取り入れることで、学習後の友人たちとの関わりにも良い効果が波及するであろう。

### 3 物語の学習

《第1時（第一場面の学習），第2時（第二・三場面の学習）》

劇づくりの学習への態勢づくりとして、学習の開始時にテレビアニメ「まんが日本昔ばなし」のテーマソングを流すことにした。児童はこの曲をととても喜び、声を合わせて歌うことで学習への態勢づくりが自然とできていった。

まず紙芝居の視聴から学習に入ったが、ページの図に示した木製の枠（黒色）を使用すると、児童が紙芝居の絵を比較的集中して視聴するようになり、効果的であった。

学習過程の後半に絵本づくりを位置づけてみたが（前ページの構造図参照）、そこでの表現についての個別の課題は右の表の通りである。児⑧，

⑫	⑧ ⑨ ⑬	⑭	⑩ ⑪ ⑮	児童
ひらかな（清音）のなぞり書き	単語のなぞり書き	文の視写（模範文は同じ紙面にある）	文章の視写（模範文は黒板にある）	課題



⑨，⑬の課題としたなぞり書きは、太目の水性ペンで書かれた字の上を鉛筆でなぞるといった内容にした。このようにして記入したり色をぬった絵本プリントを掲示できるパネルを教室内に用意したところ（写真右上）、児童は次時の絵本プリントを楽しみに待つようになった。

《第3時（第四場面の学習）》

指導者背後の黒板を黒い幕で覆ったところ、そうでない状態よりも児童は紙芝居を集中して視聴できるようになった（写真右）。普段は注意が散漫になりがちな男児⑭の視聴態度に良い効果がみられた。室内の環境づくりも視聴態度に少なからぬ影響を与え、学習意欲を高めるためのポイントのひとつになるといえる。



《第4時（第五場面の学習）》

第五場面からハチ、クリ、ウスの三人が初めて登場する。そこで右図のプリントを与え、正しい登場人物だけを選択して切りとり、絵本プリントに貼るといった課題を与えた。女児⑩，男児⑮が誤った選択をしたので、この二人には紙芝居の絵を参考にさせた。切る、貼るといった操作活動のおもしろさと、絵で正誤を判断するというおもしろさとで、8名の児



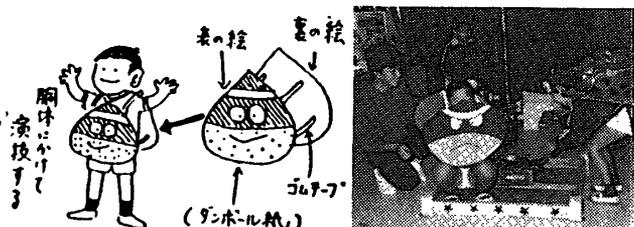
童はこの学習に積極的に取り組み、楽しい雰囲気の中で登場人物を再現することができた。

第1時から第4時までは紙芝居の視聴と絵本プリントへの記入という学習内容が多かった。そこで第5時から次の点に留意して指導にあたることにした。

- ・ 女児⑩, 男児⑬は言語面よりも主に身体運動面での表現が得意である。そこでこれからの学習に身体表現活動を取り入れ、学習に意欲的に取り組ませる。
- ・ 物語の理解が比較的良好である女児⑩, 女児⑪はこれまでの学習であら筋をほぼ理解できたため、これからは理解を実際の表現(演技)につなげていく段階に入る。そのためには身体表現活動を十分に取り入れていく。

《第5時(第六場面の学習), 第6時(第七, 八場面の学習)》

第六場面はクリがはじけてとぶという内容である。「さるかにがっせん」のあら筋はこのあたりの場面から登場人物たちのダイナミックな動きで特色づけられる。児童がこうした動きを身体表現できるようにするために、右図のような衣装をダンボール紙で製作してみた。「かくれる」「はじけてとびあがる」などのダイナミックな動きが可能になるよう、



手足を出して自由に動けるように工夫した。こうした衣装を登場人物全員に用意したところ、演技への意欲づけに大きな効果があった。着がえが簡単にできるため、練習中での配役の交代も時間がかからず、児童を待たせたり飽きさせたりすることがなかった。日頃、気にならないことがあるとカンシャク気味になることの多い女児⑩も、自分の番がくるまでの短い時間を持つことができるようになった。また、日頃発語が少なく、引っこみ思案な面のある男児⑬も衣装をつけることで生き生きとした笑顔で演技でき始めた。

第七・八場面はサルがハチ, クリ, ウスにこらしめられるという内容である。教室内に簡単なしつらえのいろいろを用意し(写真右上), 指導者がまず演技の見本を示した。そのあと, 場面を区切って児童に演技させてみた。和やかな雰囲気の中かで指導者の演技を視聴したことが児童の劇理解を促し, あら筋に沿って各児童が表情豊かに演技できるようになった。

《第7時(製本)》

第一場面から第八場面までのプリント計8枚を綴じて1冊の絵本にした。表紙をつけて大型ホッチキスで綴じさせた。製本テープをとりつけると丈夫な絵本となり, 児童はこの絵本を大切に家にもちかえた。

#### 4 劇化の学習

《第8時(配役の確認)》

配役については児童の希望を優先したが, 二名以上の児童の希望が重なった場合には二人でひと役を演じる(劇の途中で役を交代する)などの方法を取り, 8名の児童全員が自分の役を納得してから劇化の学習を開始した。8名の児童の配役を右表に示している。

第一幕は, カニがケガをする場面まで。第二幕はハチ, クリ, ウスたちがサルの家に向かう場面からの開始である。

《第9時, 第10時(教室と会場舞台での演技練習)》

「さるかにがっせん」の劇では登場人物の演技もさることながら, 児童の演技を助け, ひき立

役	サル	カニ	ハチ	クリ	ウス
第一幕	女児⑬	男児⑨ 女児⑫	女児⑩	男児⑬ 男児⑭	男児⑧
第二幕	男児⑧	〃	女児⑩ 女児⑪	〃	女児⑬



見ている前で演技することへの期待感も、演技練習への取り組みをより積極的にしていった。このことは、児童の日記や保護者からの通信によく表われていた。帰宅してからも自分の役や友人の役を演じて親に得意そうに見せたという児童もいて、この劇づくりに児童が意欲的に取り組んでくれていることをうれしく思った次第である。

## 5 演技発表（当日）の様子

劇は観る側と演じる側とで創り上げるものである。児童の演技に対して観客から大きな拍手などがあれば児童はさらに表現意欲を高めていく。表現力の育成にとって大切な必要条件のひとつにこの表現意欲の育成があると考え。本学級の演技発表では学級児童8名のそれぞれの演技に対して保護者、友人、教師からの温かい拍手が劇中で何度もあり、児童はそのあとも意欲的に演技を続けることができた。この意味で有意義な演技発表であったと考える。この日の保護者からの意見にも、この劇で児童が生き生きと演技できていたことを喜んでいたりといった内容が多かった。ひとりひとりの演技についての詳細をここで述べる余裕がないが、多くの観客を前にして日頃の練習の成果を8名の児童が物おじせずに生き生きと出せたことを大変うれしく思った。

## 6 考察

### (1) 仮説①について

劇は相手役の友人や観客の存在を意識したところに生まれるといえるが、本学級の児童は当日に親が観賞していることを励みに練習を続けていた。その意味でこのクリスマス会での演技発表ならびにクリスマスにちなんだ催しを大変楽しみにしていた。また、約2週間余りの単元期間であったが、児童の多くは学習意欲を持続させて活動に取り組むことができた。発表という大きな目標が児童の学習意欲の喚起とその持続に促進的な効果を及ぼしたと考える。

### (2) 仮説②について

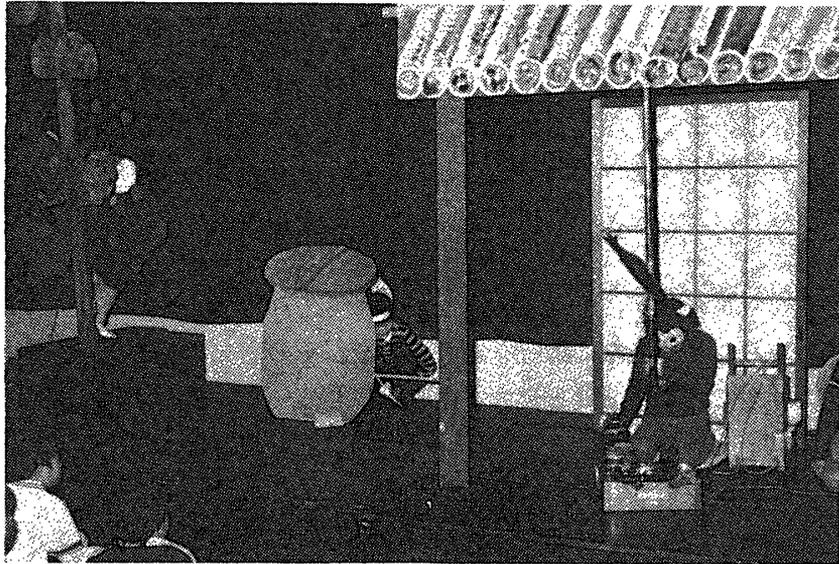
児童ひとりひとりの実態に応じて身体表現の内容をそれぞれに用意し、どの児童も劇中で必ず一回は活躍の場（いわゆる「見せ場」）を持てるようにした。たとえば女児⑮（ウスの役）には、演技用テープに録音されている「ドスン」という効果音に合わせて、高さ30cmの段からとびおりてサルを下じきにするという活動を用意して指導にあたった。このように、適度な高さから「とびおりる」という具体的な演技内容を用意し、演技のタイミングを児童が正しくつかめるように明瞭な効果音なども用意しておいたことで、女児⑮は自分の演技について苦手意識をもつことなく、落ちついて意欲的に取り組めるようになった。また男児⑬には演技用テープの中の自分の声を演技のタイミングの基準とすることで「歩く」「しゃがむ（かくれる）」などの演技を援助なしでできるようになった。練習の段階では指導者からの言葉がけを必要としていたが、演技用テープの内容のみを基準とした演技が可能になったことは本児の進歩のひとつであった。このように、演技の手がかりになるものとして演技用テープを使用したことが演技のタイミングを把握しやすくさせ、また児童が理解しやすく覚えやすい具体的な演技動作を用意したことが児童の生き生きとした演技を促すのに効果的であった。こうしたことが基盤となって児童は意欲的に劇づくりの学習に取り組み続けることができたと考え。

### (3) 仮説③について

演技用テープについては、ダビング録音をして希望の家庭に配布した。毎日のようにこのテープを家庭で聞き、友人のセリフまではほぼ暗記した児童も現れている。このように演技用テープが児童に大変人気がある。現在でも休憩時間等に聞かせると、児童は喜んで何度も演技をくり返す。このような場では、必然的に友人とかかわり合うことになり、お互いが参加する遊びとして発展してきている。こうした場づくりに目を向け、継続発展させることが今後の課題である。

資料—— 劇で使用する大・小道具の解説 ——

劇の舞台になくなくてはならないものが大・小道具類である。これらの道具は場の雰囲気をつくり出し、児童の演技意欲を高めるのに大きな力を発揮する。本学級では毎年劇の学習を継続しているが、これまでの実践の中から劇の学習に役立ってきた大・小道具類を以下解説する。下の写真は昭和61年度に中学年組の児童が演技した「さるかにがっせん」の舞台である。家の中で児⑧（サル役）がいろりにあたって暖をとっている。左側のカキの木のかけには児⑮（ウスの役）がかくれ、水がめのかげには児⑩（ハチの役）がかくれている。



名	木 (高さ約2.5m)
図	
解	劇の学習で毎回使用しているのがこの木である。厚紙で作った葉の上に赤い実をつけるとカキやリンゴの木にはやがわりする(写真)。
説	ひな段へのとりつけ部分にはくさびを使ってしっかりと固定しておく。

名	家 (柱と屋根)
図	
解	この家も劇の学習で毎回使用している(写真)。柱の上にベニヤ板(屋根の絵)をのせるので、柱はひな段の穴にしっかりと固定しておく。
説	くさびがここでも必要である。

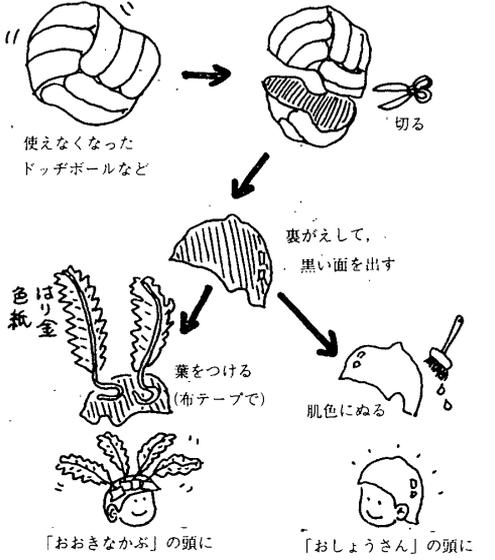
名	しょうじ
図	
解	
解 説	<p>本物のガラス障子のガラスを抜き、裏から白い厚紙を画紙でとめたものである。舞台の背後に備えつけると、部屋の雰囲気を出すことができる（前ページ写真）。</p>

名	いろり
図	
解	
解 説	<p>まるで本物の火が燃えているような雰囲気を出すことができる。 電球にセロハンをくっつけすぎると、こげくさくなるので注意する必要がある。</p>

名	草
図	
解	
解 説	<p>※裏に箱をとりつけると、どっしりと固定した草になる。</p> <p>劇の舞台ではなくてはならない小道具のひとつになっている。前述した「木」と併用することで、「農家の庭」あるいは「山道」などの雰囲気を出すことができる。</p>

名	くわ
図	
解	
解 説	<p>くわは、板と棒との結合部分をL字金具等でしっかり固定する必要がある。 「農家のおじいさん、おばあさん」の配役には、なくてはならない小道具のひとつである。</p>

名	かつら (1)
図	
解	<p>材料をあまり必要としない点が便利。        たくさんのかつらをつくる場合には、この方法を取り入れている。子どもの頭のおおきさに合わせて製作できる。</p>
説	

名	かつら (2)
図	
解	<p>丈夫で長もちするかつらである。穴があいたりして使用できなくなったボールを棄てずに集めておくと、このような用途がある。        ゴムひもととりつけて、子どものあごにかけさせると、ずり落ちることがなくなる。</p>
説	